

「ありがとう」のひとことまで

本校の校長室は、来客玄関の隣にあります。したがって、配達される郵便物や宅配荷物を校長室の窓から極力受け取るようにしています。郵便受けやインターホンがあるのだから来客玄関で受け取るのが普通でしょうが、私はひと声をかけて受け取りたいと常々思っています。

郵便配達員や宅配業者の仕事は配達です。郵便物は郵便受けに入れるだけで、また、宅配荷物は届けて印やサインをもらうだけで、責任を果たしたことになります。それ以上のことをする必要はありません。しかし、私はそれだけでは味気ないと思っています。

役目としての配達が、配達される側にとどのように映っているのかわかることが大切ではないでしょうか。「郵便受けに入れる」「印をもらう」だけでは、配達する側のモチベーションは義務だけになってしまいます。配達された側の思いがどうであるかを知ること、仕事としての配達が、やりがいとしての配達になるような気がします。配達された側の思いを表す言葉、それが「ありがとう」です。「ご苦労さま」や「お疲れさま」という声かけもありますが、そういうねぎらいの言葉よりも感謝の言葉の方が、「配達がその人に喜びを運んだのだ」と実感できると私は思います。

こう思うようになったきっかけは、北中の生徒たちの言葉です。生徒たちがかけてくれる「ありがとうございます」のひとことが私のモチベーションを上げてくれるとわかったからです。

一昨日、昨日と「こもればの森」の芝刈りをしました。真夏の作業ではありませんが、刈る面積が広いだけに時間確保、用意周到の上、覚悟して臨まなければなりません。学校施設設備の管理は校長の責任です。したがって、芝刈りや草刈りは「やるべきこと」としてやっています。その点では、先の配達と同じですね。

いつもとは違う見慣れない格好である上、眼鏡も外して作業していますので、中には校長が作業しているとは気づかない生徒がいます。しかし、その一方で、私だと気付くと声をかけてくれる生徒もいます。

「校長先生、ありがとうございますー!」

このひとことと急にやる気が出てきます。「校長がやるべきことだからやる」というモチベーションとは比べものになりません。自分のやっていることが、生徒に喜びを運んでいるとわかるとうれしさと共に、「やってよかったなあ」という満足感が生まれます。

一昨日も、そして、昨日も、私に「ありがとうございます」と声をかけてくれた生徒がいました。そんな生徒から私は教えられ、配達してくださった方には直に感謝し、「ありがとう」の言葉をかけるようにしています。

(九月十七日 記)

